杉コレ2013 審査員コメント

デザイナー
川上デザインルーム代表
川上元美 氏

延岡市主催の「木づかいイベント」は遊gwood!!と相変わらずのひとひねりしたテーマである。

毎回の事であるが、1ヶ年をかけて「杉コレ」の開催準備をする木青連をはじめとする実行委員の苦労は大変なものである。

土地の特徴を生かし、工夫を凝らしながら新しい企てのあるコンペと、付帯するイベントを同時に体験できる事は、審査に関わる一員としても、コンペの成果とともに楽しみなものである。

西都市で開催した年から子供杉コレが始まり、その後岩手県野田村との交流が始まる等、コンペが一段と幅と深味を増したように思う。

さて、子供たちのスケッチを発表会場(アーケード街に並べられた)で拝見したときの、その応募数が増えた事と、さまざまな杉に対する思いやイメージ豊かな表現、時には凡手にあらぬ鉛筆運びを見つけて感心する事しきり。

「こんなものが欲しいな」のイメージを「コレでどうだ!!」と、大人が子供心をぶつけて制作した「ロボロボ」はイキイキしていた。素晴らしいスケッチを描いた本人も感動している。又「木の打楽器」では早速に曲を弾きこなす子供、このようなシーンが印象的であった。具現化に力いっぱい精を出す大人も、明快に自分の思いを表現できる子供達の力量もすごい。

大人の部?は、今回も「穴があったら入りたい」の作品を自作した有馬晋平さんがグランプリであった。木を読む目を持ち、その発想力と製作技量はダントツである。常勝のこのコンペは卒業してください、審査員に推挙します。

「杉コレ」は木材需要、とりわけ国産針葉樹の積極的な利用を牽引する運動として、大きな効果をあげてきている。ひいては「杉ダラ活動」が、ひとびとの共感を呼び、森林整備、保全のためにも、植樹と国産材の活用が全国あちこちで見られるようになってきた。このことは林業の持続的形成や地域の活性化に繋がることになっていくだろう。

土木設計家
篠原修 氏

杉コレと市民

今年も例年の如くに楽しい作品が多く、また昨年に引き続いて野田村の小学生の参加を得て、大いに盛り上がった大会でした。実行委員会の皆さんの奮闘にはいつもながら「ご苦労様でした」と申し上げたい。

さて、2、3年前から気になっていることなのですが、発表・審査会に引き続いての懇親会には関係者一同が集い、これ又大いに盛り上がるのですが、「待てよ」と今回も思う処がありました。それは発表者や関係者の盛り上がりに比べ地元市民の参加が少なく、盛り上がりに欠ける点なのです。発表者の熱意と審査員のジョークのノリが些か空回りの感があり、こんなにもユニークで他に例を見ないコレクションであるにもかかわらず、なぜ地元が乗ってこないのか?という疑問です。どこかに根本的な「ボタンの掛け違い」があるのではないか。杉という素材と市民の距離、コレクションというスタイルと市民の距離、森林関係者と市民の距離あるいは審査員を務めるプロと市民の距離。どの距離かは分かりませんが。この距離を埋めることが今後の課題でしょう。

デザイナー
南雲デザイン事務所代表
南雲勝志 氏

杉コレは何処に向かう?

第9回目の杉コレin延岡が滞りなく終了した。第3回目だったか、延岡会団は杉コレの開催を見送った。当時、田丸会員の無念の表情は今でも忘れられない。

しかし、今年は延岡一丸となって、とは行かなかったが、工藤会長、今井実行委員長が踏ん張って大成功に終わった。工藤さんは日之影、今井さんに至っては群馬出身という辺りも時間の流れと世代の変化を感じさせた。

継続は力なり、内藤審査委員長の言葉を胸に10回は何が何でも続けよう、創始者海野さん始め、コアーなメンバーと良く話した。そして来年はいよいよ10回目を迎えようとしている。追い風や幸運に恵まれたり、予算の壁に泣いたり、過去の開催は波瀾万丈だったと言っていい。しかしながら杉コレは着実に連係プレイを重ね、人の輪をつくり、宮崎の杉活動の発進力として機能してきた。実作の振り分け、製作技術、作品をつくる盛り上がりなど、目に見えて向上してきた。加えて子供杉コレの追加や東北支援など、幅の広がりも見せていった。それは宮崎木青会以上に周りの人々や他の都道府県から客観的に見ているとより感じるものかも知れない。

杉コレは宮崎の林業や製材関係者の理想であり、夢であったと思う。10年という節目を迎え、時代の変化と共に新たな目標を掲げる事も必要であろうが、杉コレがもたらした価値と成果を一度きちんと振り返る機会も欲しい。

関係者の皆さんお疲れ様でした。素晴らしいアイディアを提案して下さった応募の皆さん、そして杉コレを見に訪れてくれた皆さん、ありがとうございました。またお会い出来ることを楽しみに。

建築家・東京藝術大学准教授
乾久美子 氏

杉コレクションは噂にたがわぬすごいコンペ(お祭り?)でした。発案者と制作者のコラボレーションで作られる作品は、異様なエネルギーに満ちていて、一見すると「なにもここまでしなくても」とたじろぐものが多かったです。しかし厚案者の思いや制作者の苦労話を聞く中ですこしずつ杉のもつ魅力に気付かされ、そこにのめり込む方々の気持ちも想像つくようになりました。みんな杉がスギなんだなあと(杉コレではデフォルトの)だじゃれを慣れないながらも使いつつ感心をしていました。個人的に好きだったのは「ユラユラゆれるのんちゃん」でした。仏像のような立派な一木造りでありながらも、野田村のゆるキャラというギャップがよかったです。あれが野田村の庁舎にごろんとよこたわっていたりすると、沢山の野田村の方に愛されそうだなあと思いました。なお、発案者のスケッチ一枚から立体を立ち上げた制作の方々の苦労を考えると、制作者も表彰されたほうがいいかと感じました。

株式会社studio-L代表
山崎亮 氏

選ばれた作品は、どれも独特の味わいがあり、トンチが利いており、突っ込みどころが満載でした。そんな作品を熱心に検討し、提案してくれた作者に敬意を表するとともに、作りにくきを作り、運びにくきを運んでくれた協力者の専門家にも敬意を表したいと思います。そして、会場に集まって審査を熱心に見学してくれた皆さんにも感謝したいと思います。楽しい場に居合わせることができたことを喜んでいます。ありがとうございました。

株式会社内田洋行代表取締役社長
柏原孝 氏

杉で何かを作ろうとすると、他の素材では生じない、人間誰しも持っている心や夢や遠く懐かしい記憶が蘇ってくるのだろう・・・と感じさせるたくさんの作品に出合いました。この審査は大変楽しくもあり難しかったですね。

内田洋行賞には一級建築士佐梁健さんの「涅槃ごっこ」を選定させていただきました。

涅槃体験と言う真面目さを、ユーモアいっぱいにミックスさせた大装置です。この作品の真価は外見では到底計り知れません。実際に木棺の中に身を横たえ、頑丈な木のふたが静かに閉まるとそこは隔絶された暗闇の世界。上を見上げると天から一条の光が差し込み、耳元から読経、外ではお鈴の音。癒されるような、心落ち着くような不思議な感覚でした。

そして強く記憶に残っているのは何とも言えない杉の香り。忘れていた「五感」にスイッチがはいりました。

森林林業協会や実行委員会そして市民の皆さんが参加の手作りのイベントで、今後の「木づかい啓発」につながるエネルギーを実感しました。オフィスや学校や公共施設での木材活用促進に力を発揮しようとの思いを強くしております。

九州旅客鉄道株式会社大分支社長
津高守 氏

今年もユニークな作品がたくさん揃った審査になりました。まさに「you good!」な作品が並ぶ審査となったと思います。

子供スギコレの4作品は本当に子供の好奇心や遊び心といったものを具体化したものばかりであり、毎回反省するのですが、子供達のほうが我々大人よりよっぽど考えていると思います。

大人の部門は6作品ありましたが、ミヤダラ三姉妹と中島さんの作品はデザインの意図を完全に具現化できていなかったのが惜しまれます。永井さん、佐梁さん及び長友さんの作品はユニークで楽しい作品であると思います。グランプリを取った有馬さんの作品は、大径木を根気よく削り込んで木の柔らかさや温かみを上手に出したと思います。ご自身で製作しただけあって、一次審査の模型の意図が見事に具現化されていて、グランプリに相応しい作品であると思いました。

来年も盛大にスギコレが開催されることを祈念しております。実行委員会の皆様、本当にお疲れ様でした。

宮崎県木材利用技術センター所長
飯村豊 氏

「杉コレクション」の審査員を務めるのはこれで三度目だが、今回はどの作品を見ても細部まで完成度が高く、出来栄えの素晴らしさに驚いた。毎年、作品が進化していることを実感し、これまで考えもしなかった形でスギが使われ始めたことに感動すら覚えた。このコレクションでは、提案者は毎回与えられるテーマで自由に夢を馳せる。その夢を具現化してきた製作者は、回を重ねて腕を上げ、自信をつけてきたようだ。作品からは、スギ素材が頑張れるところと、そうでないところを、まるでスギに確認しながら、製作を進めていったように感じられる。今までに所に見られた。スギならではの独特の表現が随わりに、割れ裂け難いという特性が生きている。

「杉コレクション」は回数を重ね、スギにはスギに合った新たな利用法を限りなく引き出す、未知の世界への挑戦の場になってきたようだ。

延岡市長
首藤正治 氏

市制施行80周年を迎えた延岡市で、杉コレ2013が盛大に開催されたことを大変嬉しく思っております。

今回のテーマが「遊具」ということもあり、お客様の中には子ども連れのご家族の姿も多かったようです。期待通り、木の温もりの感じられる面白い作品ばかりで、選考会自体も、審査員の皆さんそれぞれのお人柄が随所にあふれた大変楽しいものとなりました。

宮崎県は実に22年間にわたって杉の産出量日本一というポジションにありながら、のんびりした県民性のためでしょうか、その宣伝や資源活用という面ではまだまだなようです。それでも県南の「飫肥杉」というブランドは確立されていますが、延岡の杉はそれに勝るとも劣らぬ品質と産出量を持ちながらも、悲しいかなブランド化されてもいないしPRも不十分だとつくづく感じたところでした。

この「杉コレ」はすっかり宮崎県の恒例イベントになりましたから、この盛り上がりを今後どう経済活動としての勢いに繋げていくかが課題です。それも、できれば「杉コレ」のような楽しい軽やかな「ノリ」で行きたいものですね。

フェニックス・シーガイア・リゾート
取締役ホテル事業総括本部長
齋川慶一 氏

今回、初めて杉コレに参加させていただき、最終選考作品を拝見し、子供達の発想の豊かさ、作品の独創性に驚かされるとともに、一般部門においても遊びに対する探究心やそのこだわりに深く感銘を受けました。また、作品を通じて、杉特有のぬくもりや見た目の優しさ、肌触りの心地良さを感じることが出来、改めて杉の魅力を再認識いたしました。

私どもの施設内には、以前の入賞作品である「森のおっぱい海へゆく」、「デコボコ」、「杉のかざぐるま」、「肩車」等が設置されており、また、昨年改装したレストランにおいても、インテリアとして柱やランプ、トレーなどに多くの杉材を使用し、お客様に紹介しております。

このイベントに際し、木青会をはじめ、日本を代表する建築家やデザイナーの方々、実業界や行政の方々など多くの関係者によって支えられていることに敬意を表します。

今後、私どもとしても、県内外のより多くの方々に宮崎の杉の魅力を知っていただきたく、引続き後援させていただきたいと考えております。